

I [企画] 演じられる性

報告1：三須 祐介（立命館大学）

「秋海棠」から「紅伶涙」へ—移ろう“男性性”をめぐる—

本報告は、「男らしさ」あるいは「男性性」という概念を、近代中国文芸作品のなかで考えることを目的とする。「男らしさ」が多分にジェンダー的（社会的、構築的）であることを考えれば、「女らしさ（女性性）」と対照することがこの問題を考える上のひとつの方法となりうることは容易に想像できるであろう。その手がかりとして、「男旦」という表象を取り上げてみたい。

中国伝統劇における「男旦」、すなわち女性役を演じる男性役者は、梅蘭芳を例に出すまでもなく、その歴史的、芸術的な貢献は非常に大きい。その一方で、男旦は私寓制度に象徴されるような「男色」の気風と結びついた存在としても認識されていた。たとえば客と男旦との情愛を描いた陳森の小説『品花宝鑑』はその一例であろう。私寓制度は、田際雲の訴えにより民国元年には撤廃されるが、役者を多方面から支えるシステムは、民国期においても梅蘭芳における綴玉軒のように形を変えて連続していたともいえる。

民国期の「男旦」を主人公にした秦瘦鷗の小説『秋海棠』（1941—42年に『申報』連載）においては、悪辣な軍閥の性的欲望が美貌の男旦である主人公へと向けられる様が描かれ、清代の男色の風が延長されているとともに、「男らしさ」の危機が主人公の苦悩として描かれている。主人公の名前そのものが中国のメタファーでもある「秋海棠」は、戦争期の中国人のナショナリズムとも結びついて人気を博しながら、舞台作品や映画として改編されていった。「男らしさ」あるいは「男性性」という視点で考えた時、この作品の改編のひとつ、1960年代の香港映画「紅伶涙」が興味深い比較対象となりうる。ここでは、男旦の主人公が「生（男役）」となって軍閥の性的欲望の対象ではなくなり、自己認識としての「男らしさ」をめぐる危機や屈託は解消されるが、一方で主役の座は李麗華演じる女性役者へと移る。これは当時の黄梅調映画に代表される女優重視の影響もあるが、ある意味、形を変えた「男性性」の危機と考えることができるかもしれない。

報告では、「男らしさ（男性性）」をめぐる表象の描かれ方について、小説と二つの映画版（1943年馬徐維邦監督「秋海棠」と1965年羅臻監督「紅伶涙」）を主な対象に分析を行ない、「男旦」をめぐる「男性性」の危機と近代性の問題や「紅伶涙」と入れ替わるように登場する張徹監督の男性（を魅せる）映画作品群なども視野に、近代中国文芸作品における「男性性」について考察する。